

【ポスター発表】

**介護支援専門員のケアマネジメントに関する相談ネットワーク****—多様な相談相手との関係の構築—**

○ 日本赤十字秋田短期大学 永野 淳子 (6325)

キーワード：介護支援専門員、相談ネットワーク、相談相手

**1. 研究目的**

包括的・継続的ケアマネジメントの実施が求められている中で、介護支援専門員には、ケアマネジメント業務の遂行のために様々な知識と技術の統合が要求されており、自らの知識と技術をもってしても判断や解決に悩むことなどは、他者に相談せざるを得ないこともある。先行研究においては、困難ケースへの対応として介護支援専門員が他の専門職者等へ相談をしている実態が明らかにされている。また、医療・福祉以外の専門職者への相談の必要性を示唆する研究もある。こうしたことから、介護支援専門員には、ケアマネジメントに関する知識や技術の更なる習得も必要であるが、それだけには頼らない、多様な他者を相談相手とできるようなパーソナル・ネットワークを構築することも、ケアマネジメント業務を進めるうえでは必要なことであるといえる。

本研究の目的は、介護支援専門員のケアマネジメントに関する相談ネットワークの構造と特徴について明らかにすることから、多様な相談相手との相談ネットワーク構築のための知見を得ることである。

**2. 研究の視点および方法**

対象：調査対象者は、X県内の指定居宅介護支援事業所に勤務している介護支援専門員(1,141人)であり、彼らに郵送法によるアンケート調査を実施した。有効回収率は44.0%(503通)であった。質問項目：1)介護支援専門員の属性(年代、性別、基礎資格、実務経験年数、所属事業所の介護支援専門員の人数)、2)相談相手の人数(最大5人まで)と相談相手の属性(関係9種類(職場の同僚、職場の上司、職場の部下(後輩)、以前の職場同僚、以前の職場上司、以前の職場部下(後輩)、他事業者の人、友人、その他)、所属機関、職種、知り合ったきっかけ、知り合ってから期間、接触頻度、親しさ、相談の有無、意見・助言の有無)である。分析：調査対象者の属性、相談相手の属性について、関係9種類との関連性を中心に相関分析を行った。その後、二項ロジスティック回帰分析を用いて、関係の種類数を増やす因子について検討を行った。

**3. 倫理的配慮**

本研究は、日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学研究センター倫理審査委員会による承諾を得た。調査票を配布する際に、本研究の概要と調査の目的、回答された調査票の保管方法や、本調査の結果が公表されることを調査対象者へ文書にて説明を行い、

返送される調査票へ同意の意を記入してもらった。

#### 4. 研究結果

相談相手の人数として、1人から5人までの平均4.25人(SD=1.095)があげられた。相談相手として最も多くあげられた関係が「職場の同僚」(延べ756人)であり、次いで「職場の上司」(延べ598人)、「他事業者の人」(延べ348人)であった。関係の種類は、平均2.61種類あげられた。相談相手の人数に関わらず相談相手としてあげられた関係は、「職場の同僚」と「職場の上司」であり、相談相手の人数と関係の種類数との間には、正の相関が認められた( $p<.001$ )。また、関係の種類数と負の相関が認められた関係は、「職場の同僚」と「職場の上司」(共に $p<.01$ )であり、残りの7種類の関係は正の相関が認められた。

「実務経験年数」と正の相関が認められたのは「職場の部下(後輩)」と「他事業者の人」(共に  $p<.001$ )、関係の種類数( $p<.01$ )であった。「介護支援専門員の人数」と関係の種類数との間には負の相関が認められ( $p<.01$ )、「職場の同僚」と「職場の上司」(共に  $p<.001$ )は、正の相関が認められた。親しさの「仕事でのみ交流」と正の相関が認められたのは、「職場の同僚」と「職場の上司」(共に  $p<.001$ )であった。親しさの「個人的にととても親しい」と正の相関が認められたのは、「以前の職場上司」と「以前の職場部下(後輩)」、「友人」(いずれも  $p<.001$ )、「他事業者の人」と「その他」(共に  $p<.05$ )であった。また、相談相手からも意見・助言を求められる関係と正の相関が認められたのは、「職場の同僚」と「職場の部下(後輩)」、「他事業者の人」(いずれも  $p<.001$ )、「以前の職場同僚」( $p<.01$ )、関係の種類数( $p<.001$ )であった。

関係の種類数を「1.2種類」(=0)と「3種類以上」(=1)の2群に分けて従属変数とし、調査対象者の属性と相談相手の属性を説明変数とした二項ロジスティック回帰分析を行った。その結果、「3種類以上」は「1.2種類」と比べて、「介護支援専門員の人数」が関係の種類数の減少と有意な関連があり(オッズ比 0.847,  $p=.000$ , 95%CI:0.776-0.924)、相談相手が「職場の部下(後輩)」、「以前の職場同僚」、「50代」、「(知り合ってから)2年未満」、「(知り合ってから)4年未満」、「(知り合ったきっかけ)その他」、「(接触頻度)少なくとも週1回」、「意見ある」、「個人的にととても親しい」であると、関係の種類数の増加と有意な関連があることが示された。

#### 5. 考察

「職場の同僚」と「職場の上司」といった身近な人は、誰もが頼る相談相手であることがわかる。また、関係の種類が増え、相談相手に多様性がみられるためには、相談相手からも意見や助言を求められるお互いさまの関係や、接触頻度が少なくても親しいと思える関係が築けるための他者との信頼関係の構築が必要であると考えられる。また、以前の職場の人が相談相手とされることから、介護支援専門員としての経験を積む時間とその時間に何をすることも、重要な要素ではないかと考える。